

武田泰淳全集

第三卷

武田泰淳全集

第三卷

筑摩書房

武田泰淳全集 第三卷

昭和四十六年七月十七日 初版第一刷発行
昭和五十三年三月十日 増補版第一刷発行

著 者 武 田 泰 淳

発 行 者 岡 山 猛

発 行 所 株式会社 筑 摩 書 房

東京都千代田区神田小川町二ノ八
郵便番号 一〇一一九一
電話 東京(29)七六五一(代表)
振替 東京 六一四 一二三
印刷 株式会社 三 松 堂
製本 和田製本工業株式会社

武田泰淳全集

報 3
第 3 卷 付録
1978年 3 月
(初版月報より再録)

目 次

武田泰淳のなかに
流れているもの……………増谷文雄
目黒の風呂・驪山の湯……………杉森久英
武田泰淳と敗戦後の風景……………渡辺広士

東京都千代田区
神田小川町2の8
筑 摩 書 房

武田泰淳のなかに流れているもの

増谷文雄

小石川水道端の奥まったところに興学舎という寄宿舎があった。浄土宗の寺院の子弟などで、上京して勉強している学生たちが、まるで梁山泊のようにして寄宿していた宿舎であった。東大に通っているものもあれば、早稲田に行っているものもあった。かと思うと、まだ中学の生徒だったものがいたことも思い出される。なんの規則もなく、まったく自治の生活をしていたのだが、それでも、名目だけの舎監があった。おなじ寄宿舎の先輩で、宗教大学（いまの大正大学の前身）の教授、大島泰信先生がずっとその任に当っておられた。

大島先生はそのころ、おなじ小石川の白山上にあった潮泉寺の住職でもあったので、なにかと相談ごとがあると、わたしどもはよく白山の坂をのぼってその寺の門を叩いた。最近泰淳さんも鼻下に髭をたくわえたので、すっかりお父さんを彷彿とさせるようになった。それでお父さんの泰信和尚の風貌も想像していただけたというものだが、やはり、鼻下に髭をたくわえ、その口辺にアルカイック・スマイルをうかべ、黙然として端坐したさまは、どこか達磨さんを思わせるものがあった。それに、泰信和尚はまことに寡黙な方であって、わたしどもが数百言をつらねて申しあげることにも、たいていは、「うん、そうか」とか、「うん、よからう」とで終りであった。それには、話のつぎ穂にこまることも一再ではなかった。そんな時、となりの部屋で少年が相撲をとっているらしい音を聞いたことがある。それがまだ中学生であった泰淳さん兄弟のしわざと知

られた。

だが、あとで聞くとところによると、泰淳さんの相撲の相手は、兄さん許りではなかったらしい。伯父さんがまたそれであつたらしい。その伯父さんというのは、渡辺海旭といえは知る人もすくなくないであろうが、わたしどもがいまでも毎日厄介になっている、『大正新修大藏經』の監修者として、また近代の名僧として有名な方である。その海旭先生は、深川の西光寺という寺におられたが、一生を独身で通された方であつたので、時々、妹御の嫁がれていた潮泉寺を訪れて、家庭的雰囲気ひたつておられたらしい。その間は、すっかり童心にかえつて、泰淳さん兄弟と相撲をとつたこともあつたという。それは、わたしが海旭先生からじかに聞いたところである。

その泰淳さんが、戦後派作家として颯爽として現れてきたころ、わたしは図らずもある仏教雑誌の企画で対談する機会があつた。その時わたしは、まさきに、泰淳さんの海旭先生にたいする印象を聞いてみた。それに対する泰淳さんの答えは、自分はまだ子供のころのことであつたので、伯父さんの偉さはよく解らなかつたということであつた。だが、そのうち、家にある写真などを見ていると、つくづく、「明治の人は責任をもつた顔をしていると思う」

といった。その一句を、やがて亀井（勝一郎）さんが取りあげて、「文芸春秋」の明治を語る座談会で紹介してから、しばらく、明治の人間は責任をもつた顔をしているといつた方がいい方が、ちよいちよい見受けられたが、その出処は、もと泰淳さんが伯父の海旭さんの印象を語つたことばであつた。

ともあれ、そんな具合で、泰淳さんのなかには、父方にしても、また母方にしても、仏教の名門の血がながれていく。その泰淳さんが、警察にあげられたり、北大の助教になつたり、それから加行といつて坊さんになる修行をして、西光寺の住職になつたりしていたが、戦後のどさくさのなかから、ついに作家として現れてきた。その作品には、わたしもまた当然、浅からぬ関心をもっているのであるが、その関心にはおのずから、いささか世の一般の文学の読者、乃至は文学評論家たちのそれとは異なつたものが含まれているのである。

たとえば、彼の初期の作品に「異形の者」がある。それは、いまもいう彼が増上寺で加行をうけた時の体験がその原型になっているにちがいない。その加行僧たちの言動の猥雑をきわめる表現は、まさに眉をひそめるに足るが、それも必ずしも誇張されたものではない。その加行僧たち

が、やがて「大殿の正面ふかくすえられた大きな金色のアミダ如来像の前で、深夜十二時を期して」一人々々が誓いをたてる。愚かしい決闘を明日にひかえた「私」もまた「蠟燭を手わたされる」と、大殿に入って仏像と対坐する。そこで「私」がその仏像と対話する科白がいつまでも忘れられない。

「俺もこうしてあなたの前に坐っていると、馬鹿らしいとは考えても、何かしら本心を語りたくなるのだ。あなたは人間でもない、神でもない、気味のわるいその物なのだ。そしてその物であること、その物でありうる秘密を俺たちに語りはしないのだ。俺は自分が死ぬか、相手を殺すかもしれない。もう少ししたてば破戒僧になり、殺人犯になるかもしれないのだ。それでもあなたは黙って見ているのだ。その物は昔からずっと、これから先も、そのようにして俺たち全部を見ているのだ。仕方がない」

そして、「私」は、一日に何回お念仏をとなえるなどと誓うことはできないけれども、もし生きていたら、無意識のうちにでも、かならずあなたを想い出すだろうと誓う。そこには、どうやら、生れる前から仏教につらなる血がながれている者にしてはじめていえる言葉のはしびしが感ぜ

られてならない。

やがて泰淳さんは「ひかりごけ」を書いた。それを早速、平野謙さんが取りあげて、本格的な宗教文学が現れたと称揚した。読んでみると、そこには、宗教の、仏教のといった文字は一字もでて来ない。泰淳さんがそこに描いているのは、北海の知床半島の沖合で難破した船の船長が、人肉を食ってただ一人生きのこったという物語によって、いわゆる限界状況におかれた人間の、現実社会の倫理も論理もこえた生のありようの主張である。船長は彼を追求する検事にむかって、「私は検事殿に裁かれても、裁かれたとは思えません」という。

わたしども宗教学者たちは、最近、宗教というものを、神や仏や、天国や極楽といった上の方からではなくて、どん底にあえぐ悪人や罪人、限界状況におかれた人間のがわから尋ね入ろうとしているのであるが、泰淳さんがそこに描き出したものは、まさにそのような人間のありようそのものであった。それを早速、本格的な宗教文学として取りあげた平野さんの評論に敬意を払うとともに、泰淳さんがさらにそのような人間の深みにわけ入るであろう文学的作業からわたしは目を放さないようにしている。泰淳さんのなかに流れているものは、きっと、まだまだ優れた作品を

生みだしてくるに違いないと思うからである。

(仏教学者)

目黒の風呂・驪山の湯

杉森久英

武田さんにはじめて会ったのは、終戦直後の冬、雑誌「批評」の同人会の席であった。そのすこし前、私は中村光夫氏の紹介で、「批評」の同人に加えてもらい、おなじころ武田さんと堀田善衛さんも同人になったらしいが、終戦前のどさくさで、会う機会はなかった。

同人会は有楽町のマーケットのバラック建てのおでん屋で開かれた。みんなの前にカストリの茶碗がおかれていた。河上徹太郎氏や吉田健一氏のように酒の味にやかましい人たちも、そのころは神妙にカストリを呑んでいた。

そのころ私は「進路」という雑誌の編集者をしていて、武田さんに「嬢のすゑ」という小説を書いてもらった。二回か三回に分けてのせたが、批評などでも大変好評で、私は面目をほどこした。「進路」で評判になった作品といえ、この作くらいのもではなかったかと思う。私は編集

者として力備不足で、ほかに評判になるほどのものをのせることができなかったが、武田さんのこの作だけは、力の充実した作品であった。

その後私は河出書房へ移って「文芸」の編集を担当した。「文芸」は「新潮」「人間」「群像」「文学界」とならぶ文芸雑誌のひとつだが、私は編集に新味を出すために、私と同じ年代のいわゆる戦後派の人たちの作品をのせることに重点を置いた。

武田さんも戦後派のひとりで、ときどき座談会に出てもらったり、作品を書いてもらったりした。新しく「序曲」という戦後派だけの季刊誌を出したときも、武田さんに同人になってもらい、小説を書いてもらった。

しかし、そのうち武田さんはあちこちの雑誌から目をつけられ、ひっぱりだこになって、なかなか私の方へは書いてもらえなくなった。最初からのつきあいを楯にとつて、強引に他を押しつけて執筆を懇願すれば、書いてもらえたかも知れなかったが、こちらの経営がわるくなって、せっかく書いてもらっても、原稿料が払えるかどうか、わからなくなつて来た。代金を支払えるかどうかからぬのに、商品券を発売するのは詐欺行為である。経営不振の雑誌の編集者は、多かれすくなかれ詐欺行為を強請される。私は友人



中央武田 久松義久
右杉森 泰淳
左の長城に
万里の

から財物（原稿も財物である）を詐取したくないために、原稿を依頼することを控え目にしなければならなくなつた。これまで親友だと思つていた——そして、むしろそう思つてくれていたにちがいない人を訪問するのに、私はだんだん肩身がせまくなり、遠慮がちになつた。そして、編集者の世界から消えてしまつた。

一度、武田さんの目黒のお家に泊つたことがある。夜おそくまで、武田さんと酒を飲んでゐるうちに、武田さんは、

「ねえ、うちへ泊れよ、杉森さん。こんど、うちは風呂場を新らしくしたんだ。タイルが白くて、気持ちがいいよ。あの風呂へ入れよ」

と、しきりに誘つた。終戦後まもないころで、焼け出されの私は、うちに風呂がなく、近所の銭湯へゆくのが一苦労だつたし、そのころタイル張りの風呂

といへば、たいへんな贅沢だったから、私はその晩、武田さんの家へ泊つた。しかし、いくら考えても、私の頭に武田家の風呂場のイメージが浮んでこないところを見ると、せっかく武田さんにつれられて、目黒くんだりまで行きながら、行つたとたんに酔いつぶれて、そのまま寝てしまつたのではないかと思う。そのかわり、あくる朝は、うつくしくて品のいい武田さんのお母さんに、きちんと朝の御挨拶を申しあげて、朝飯をいただいたことは、はっきりおぼえている。

武田さんは私を目黒の自分の家の風呂へ入れてやろつといいながら果さなかつたが、そのかわり、それから二十年後に、私を中国へつれていって、驢山の湯へ連れてくれた。むかし目黒に驢山荘という料亭があつて、まぎらわしいが、あれではなく、本物の楊貴妃が入つた、中国の西安の驢山の湯である。文化大革命の年だったが、武田さんは中国訪問作家団を引率して、中国へ視察旅行に出かけるとき、私を一枚加えてくれたのである。ほかの人は、永井路子さんに尾崎秀樹氏という顔ぶれだった。

武田さんはおそらく、私に新しい中国の実情を見せて、中国を認識させ、中国のよき友人にしてやろうというつもりだったのであろう。

私はたしかに中国の実情を見、認識を深めたつもりである。しかし、私の得た結論は、ほかの多くの人のように、中国は偉大な国であるというより、むしろ気の毒な国であるという方へ傾いていた。私は武田さんの好意が身にしみてわかるだけに、中国について樂觀的な結論が出せない自分を悲しんだ。私は驪山の麓の華清池の、水成岩らしい黄色な浴槽の浅い水に、武田さんと、二匹のマグロのように裸体をならべながら、日本へ帰っても、なるべく中国についてあまり本当のことや批判的なことを言わぬようにしよう、自分に言い聞かせた。

しかし同時に、私はきつと、いまに言わずにいられなくなるだろうとも、うすうす感じていた。王さまの耳の異常を発見した理髪師が、人に言わずにいよう、いようと思いつながら、とうとう言わずにいられなかったように、私は結局、中国について、思っていることを言わずにいられないだろう。そのとき武田さんが、ひどい奴だと怒っても、しかたがないが、どこか一点でも、まあ、あいつはあんな奴だから、仕方がないさと、ゆるしてくれればいいと思っている。武田さんの好意にそむきながら、友情だけは失いたくないというのは、私の虫がよすぎるのだろうか。

(評論家)

武田泰淳と敗戦後の風景

渡辺 広士

昨年の十一月、私はインドの首都ニューデリーにいた。たった三日であったが、そこで見たものは、ヨーロッパに五月か滞在したあとの私の中にあつたものを容赦なく打ちこわしてしまった。私の中にあつたものとは——なんと言おう——端的に言えば文明であろう。私は、私が育つた日本で自己を形成してきた、もはやこれが日本だこれがヨーロッパだと普段に分けて認識しているわけにはいかない文明なるものの、よりはっきりした源を保存した国ぐにに、その風土と人間に触れてきたのだが、インドはその文明のイメージの土台を揺すぶつた。それを揺すぶつた条件にはいろいろあり、言うまでもなく第一に人間たちの姿がそうであったが、しかし包括的に言えば、特にものの形が——人間の形をも含めて——私の中の文明を揺すぶつた最大の力である。

ものの形。ヨーロッパ文明は旧約聖書とギリシャの昔から、形象という思想に憑かれていて私は考えており、カ

フカを論じた私の本の中で、カフカを捉えていた根強い「形象の思想」を最初に考察したが、現代インドにおけるものの形はまるでヨーロッパ的な「形象の思想」のアンチテーゼである。そこに見えていたあらゆるものの形、その空間の中の、目に映るあらゆる人間的な、また人間的でない、自然的な、また人工の、静止している、また動いている、人間と事物の、実体と非実体の形。それがインドにおいて、なんと奇妙に無秩序であったことか！ 建物は――権力の容れものである官邸、銀行、ホテルなどを除いてはすべてどこか歪んでいる。中心商店街にもバラックが多く建っているが、それらは同じバラックでも日本ならこうは建てないと思うように、柱か屋根か壁かどこかしらが必ず歪んでいる。またただっ広い、砂ぼこりのひどい大通りの両側にはレンガを積んだつくりかけの塀があったりするが、それらはほとんど積みかけで、片端から仕上げて行くというのでなく、まるでわざと完成を避けているようである。新しい道路際に等間隔で並ぶ、うすい鉄板製の飾りものは、道路が出来あがらないうちにひっくり返っている。市場ときたら建物も店先も恐ろしい猥雑さである。それらを見ながら私は思う。まるでインド人は形を整えることを望んでいないかのようにだ。この外見の世界、現象の世界！

ヤノーホとブラハの街を歩いていたカフカが「古い家並の静まりには爆薬のような作用がある」と語ったように、外側の風景は気がつくときぼくの内部にある。

私はいま武田泰淳の「風媒花」のページを繰っていて、敗戦後の日本の風景のイメージをまざまざと思い描かせる記述に出会った。そのとき同時に思い出したのが、ニューデリーで見た風景であった。まったく似ているというわけではないが、どこかが共通している。形をつくり整える力がないか、または整えることを望まない力がどこかに働いているのかなのだ、文明意識と反対のものが。へどこかへとはもちろん、その風景の中に生きている人間の中の目に見えないもの、つまり集合としての人間の共通の実存の状態にある。

たとえば、こんな風景――「酒蔵ホールを出て右折すると、電車線路。二つ三つ立ち並ぶ高層ビルのため、線路は暗く、乗用車やバスのヘッドライトと警笛が、歩行者をおびやかしては流れつづいた。ガード下には石地蔵か墓石のように靴みがきの群。そして、水滴のにじみ出す古い壁には、自称「日本主義者」たちのビラが白々と、死の装束に似て貼りついてゐた」。そして「共同便所と交番が仲良く肩を接した三角の空地」には「カフエの開店披露のちらし」広

告」へ基金カンパの呼びかけ、当らなかつた宝くじの紙屑へ街頭写真師が通行人にわたしたカード、東京見物のべんとうを包んで来た新聞紙。そしてそのあたりには白衣の傷病兵がたむろする。

私は直ちに、自分の記憶の中にあるあの光景を思い出す。この狼狽さが敗戦後だった。われわれの生きていた、外部にして内部であつた空間だった。文明的なものがある。電車線路、ビル、車の流れ。(ニューデリーにもそれはあつた。形の崩れを思わせるのは自然なものでなく、むしろ文明と無秩序の同居だ。)だがへ墓石のようにであつたり、死のイメージに近いへ白装束を着ていたりする人間たち。それからコミュニケーションの要求という文化的意志をあらわす紙切れは、いたずらに過剰で、むだに地に落ち、そこに風景の美観に反する乱雑さを生み出している。

これらの人間たちに墓石や死のイメージを見るのは作者自身であり、比喩は作者の目の選択を示している。また地面の紙切れを特筆するのも作者の目である。だがそれらの自己の外部のものによって内部の形を避けられないものとして表わしているこの文章は、あの時代の共通の生存を如実に語っている。破壊から生き残って復興を目ざしている文明の形の中に、逆にそれを絶えず無秩序へ、混乱へ、形

の歪みへと引き戻そうとする超個人的な意志がどこかに働いているかのようだ。そしてそれは生成の力であつたのかもしれない。いま沢山の引用をして説明するわけにはいかないが、「風媒花」という小説全体にそのような意志が働いている。「風媒花」は極端に言えば、全体が風景であり、おそらく中村光夫なら「風俗」と呼ぶだろうが、この風俗はまさに、古典的な永遠の美にも関係なく、また愛慾の打明け話の主人公たちが登場する時代の書割でもなく、小説が混沌の中に押し戻された時代の歴史の中に、熱っぽく関わり合おうとしておのずから生きた風俗であり、風景である。

これは同じ敗戦後の風景を描いた他の小説家たちの作品を比較に持ってきてみればわかるはずだ。そう思つて私は、「焼跡のイエス」や「深夜の酒宴」や「武蔵野夫人」や「顔の中の赤い月」その他あれこれを開いてみた。どれにも戦後風景は書かれている。しかし武田泰淳ほど強く風景そのものに惹かれ、広くかつ具体的に風景を書きとめている小説家は見あたらなかつた。

(評論家)

* * *

第三卷 目 次

椅子のきしみ	3
母の出発	15
筋 肉	36
情婦殺し	55
物言う鼠	82
女の部屋	85
獣の徽章	107
由井正雪の最期	126
めがね	135
うまれかわり物語	150
春日異変	189

	F花園十九号	205
	冷笑	275
	第一のボタン	294
	あいびき	368
	巨人	381
	女地主	400
	風土記	450
	奇蹟の掌	462
	宇宙博士の恋愛	481
解説	松原新一	497
解題		509

小

説

3

椅子のきしみ

「主任さん、お電話です」女事務員が知らせたとき、森にはすぐ三島幸子からだな、と予感がした。そして「また、五万円かな。そう来ると思った」と、銀行を訪ねてくる腹に一物ある客と応対するまえの、気軽そうな、しかし自信ある様子で起ち上った。

「あのね。森さんでいらっしやいます？ あ、わたしね、ちょっとお話したいことがありますの。むずかしいことでも何でもありませんのよ。ただちょっとね」と、ごく自然な、そのくせ甘い気持のよい声が、エボナイトの受話器のなめらかな耳ざわりの中に、たのしげにきこえた。

「……もちろん、お金のことでありませんの。そんなこと忘れて、森さんと一日、楽しくお話したいと思ひまして。子供たちもお友だちのおうちへ、およばれて、わたし一人ですの。ええ、お昼少し前がよろしいの。料理をちょっとつくりましますから。来て下さる？ うれしいわ。ほんと、とてもうれしいの」

会って感じよき女性一人、御紹介申上げます、と友人のそえ手紙にあった。「夫君は入院中。子供二人。金の相談であること言うまでもなし。貴兄の高等数学は、この女性に対して、いかなる計算をなすや。小生のもっとも興味あるところです」高等学校の同級である、その皮肉な学者に紹介されて、三島幸子は、十日まえに、森の自宅を訪問した。

たしかに愛くるしい三十女であった。少女のもっている、あのわざとらしさのない媚びがその小柄な全身、すばらしく白い丸顔にそのまま残っていた。愚美人とでも評すべきだろうか、底ぬけのほがらかさが、繊細なまぶたや、小さな口もと、大きな両眼にかがやくようにあふれていた。

「……あの、わたし何て言うんですかしら。とても男のかたには好かれるたちなんですのね。今度の部屋をさがすについても、そのために、そりゃとてもいろんな目にあひましてね」

ジメジメした貧乏なしを、おとき話に作りかえ、自分
がその主人公の可哀そうな女王にでもなったつもりなのか、
女は自由に喋った。

「部屋を世話してあげると言ったださる方は、立派な重役
様でしてね。主人が新聞社につとめていたころのお友だち
なんですの。外国へも何べんも行ってらっしゃった方だね。
主人はまだ入院していませんでしたが、主人のいいつけで
わたくし一人で部屋を見に行ったんですの。もちろん立派
な西洋館でしたの。その部屋に入ると、その男の方、いき
なり、ドアをおしめになって……。ボクはキミを一目見た
ときからスキだった、とおっしゃって……。それからギュ
ウウッと抱きつきなさってね。わたくし、もう、びっくり
してしまっ、大きな声あげて、必死になって騒ぎました
のよ」

悪戯な少年のように客がよく澄んだ眼で、こちらに笑い
かけると、森は応接間の椅子のきしむのを避けるため、ジ
ッと身じろぎもしないでいた。まだ三月のはじめだという
のに、自分の肉体の周囲だけ、ポツテリとぬくもっていた。
「……もちろん、わたくし、死ぬつもりで身を守りました
から、どうってこともなかったんですけど。おどろき
ましたわ、男の方って。それから女学校の五年のころ、新
劇に入ろうとしてたんですの。そのときも、有名な俳優の

方」とその話もした。俳優にいどまれて、二階から跳び
おり、足袋はだしで逃げかえったという話だった。そんな
事件が度重なつても無理もない、あまりにもあけはなされ、
無防備の、柔軟なすぎとおるような肌、紺の古い男物を
仕立てなおした夫人のスーツの下に感ぜられた。

翌日、五万円はすぐ融通した。それを手渡した以上、あ
とまた金が出ることは覚悟している。それはもう、玄関の
ベルで、病身の妻が子供の着がえをさせている間に、森が
ドアをあけたとたんに決定した。赤と紺の手袋をはめ、み
すばらしい大きな外套の下に身をすくませ、叱られた女学
生のようにうるんだ瞳で、寒い午前の外気の中に夫人が立
って、こちらを見上げているのをみつめた数秒間に、きま
ってしまったことであつた。

銀行員の森は職業がら、きちょうめんな生活を送ってい
る。貸付係りといえ、このはげしい世の中に、神経のつ
かれる仕事ではあるが、暮し向の不安はないといえる。金
を借りたがる事業主たちは、週に三、四回は酒の席へ森を
つれ出す。酔つても寝こむだけで乱れないたちだし、しい
て騒ぎをひきおこす子供らしさも失せていた。女をあてが
われても、その夜のうちにかならず帰った。金網や木の柵
や、用心ぶかい一線を張った出納口の内部から、昼休みで
も外出しないで、ヒソソリしたコンクリート建築の奥にひ